

<http://business.nikkeibp.co.jp/>



名護での敗北が安倍政権の支持率低下の引き金に  
普天間飛行場の移設は我慢比べ 2014年1月22日(水)

沖縄県名護市長選で、米軍普天間飛行場の辺野古への移設に反対する稲嶺進市長が再選を果たした。同氏は「辺野古の埋め立てを前提とする手続き、協議に関してはすべてお断りする」との姿勢を強める。日本の安全保障はどうなるのか。日米関係の専門家、川上高司・拓殖大学教授に聞いた。  
(聞き手は日経ビジネス 森 永輔)



川上 高司 (かわかみ・たかし) 氏  
拓殖大学教授

1955年熊本県生まれ。拓殖大学教授。大阪大学博士(国際公共政策)。フレッチャースクール外交政策研究所研究員、世界平和研究所研究員、防衛庁防衛研究所主任研究官、北陸大学法学部教授などを経て現職。この間、ジョージタウン大学大学院留学。(写真：大槻純一)

ー1月19日に沖縄県名護市で市長選が行われ、米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の名護市辺野古への移設に反対する稲嶺進市長が再選を果たしました。これは今後、日本の内政や安全保障政策にどのような影響をもたらすでしょう。

川上：まず、安倍政権の支持率を低下させる引き金になる可能性があると考えています。安倍政権は、辺野古の埋め立てをこれまで通り進めていく方針を表明しています。そうすると、名護市長選で勝利した勢いを駆って、反対する人々が様々な抵抗を試みるでしょう。座り込み運動はもちろん、埋立地周辺の海に飛び込む人が現れるかもしれません。けが人や死者が出ることも考えられます。こうした中で計画を進めると、国民に「強引」という印象を与えます。

### ー公明との連立解消も視野に

次に自民党と公明党の連立にネガティブな影響を残す可能性があるでしょう。公明党は今回、「自主投票」という沖縄県本部の方針を容認しました。公明党が持つ票の大半が稲嶺氏に投じられました。

問題はこれが沖縄に特有の現象なのかどうかです。安倍政権は今後、憲法の改正や集団的自衛権に関する解釈の変更など、安全保障政策の根幹を変える政策を進める予定です。その中で、今回と同様に、公明党が自民党と異なる路線を取ることが考えられます。そうなれば、連立政権が分裂することにつながりかねません。

沖縄政界でも辺野古への移設に反対する声が高まるでしょう。今年は名護市議会議員選挙が予定されています。現在は移設反対派が2議席多く持っています。今回の名護市長選の結果から考えて、推進派がこれを逆転するのは難しいでしょう。

11月には沖縄県知事選挙があります。仲井真弘多知事が再選を目指すとしても、今回の名護市長選の結果がマイナスの影響を及ぼす可能性が大きい。仮に移設反対派の知事が当選した場合、移設が進めづらくなることは避けられません。いったん承認した埋め立てを撤回することまではしないでしょうが。

### ー普天間飛行場の移設に具体的にはどんな影響が出るでしょう。

川上：政府と名護市がどちらも譲らず、我慢比べの状態になるのではないのでしょうか。稲嶺市長は「市の管理権の及ぶところはきちっと対応していく」と語っており、法律に基づく市長権限を使って埋め立てを阻止する意向です。一方、政府は、菅義偉官房長官が「普天間の固定化があってはならない。日米合意を粛々と進めていく」と表明しています。

名護市が反対の姿勢をどれだけ強く、そしてどれだけ長く続けられるが焦点になると思います。政府も同様です。移設を進める意志に陰りが見えれば、反対運動がさらに高まり、移設を進めることが難しくなるでしょう。

当面の争点は稲嶺市長が漁港の使用を許可するかどうかですね。漁港周辺を代替施設建設のための資材置き場などに使うことが予定されています。

### 冷え切った日米関係に追い打ち

#### ー対米関係に及ぼす影響をどう見ますか。



川上：現在の日米関係は冷え切っています。これが、さらに悪くなることが懸念されます。オバマ政権は、オバマケアや予算を巡って議会との対立が深まる中、沖縄に駐留する海兵隊をグアムに移設する予算を苦勞して獲得しました。もし、普天間飛行場の辺野古への移設が再び滞ることになると、この予算が無駄になります。次回はもう取れないかもしれません。

普天間飛行場をこのまま使い続けることになると、米国はそれに必要な修繕費などを日本に求めてくるかもしれないですね。

一日米関係が「冷え切った」のは、安倍晋三首相が靖国神社を参拝したことが原因でしょうか。

川上：靖国神社参拝は大きな要因ですが、それだけではありません。オバマ大統領が再選し外交チームを入れ替えた時から雲行きが怪しくなっていました。日本を深く理解していたヒラリー・クリントン国務長官が退任。後任のジョン・ケリー長官はアジアに大きな興味を持っているようには見えません。

ホワイトハウスの安全保障担当も親中のメンバーに交代しています。大統領補佐官のスーザン・ライス氏は昨年 11 月、中国が主張する「新たな大国関係」に意欲を示す発言をして注目を集めました。同氏の下でアジア上級部長を務めるエバン・メデイロス氏も親中派です。親中路線は国家安全保障会議（NSC）の総意と言われています。安倍首相の靖国神社訪問に対して発せられた「失望（disappointed）」という表現も NSC が挿入した可能性が高いでしょう。

中国が防空識別圏を設定した時のジョー・バイデン副大統領の態度も煮え切らないものでした。中国は、バイデン副大統領が訪日する直前に、東シナ海に防空識別圏を設定。訪日した同副大統領は安倍首相とともに「これを認めない」と強調しました。しかし、その直後に訪中したバイデン氏は、防空識別圏を取り下げるよう中国に要望することはありませんでした。

そして靖国神社への参拝です。米国は再三、説得を試みたようですが、安倍首相は聞き入れませ

んでした。この件について、安倍首相に戦略があったとは思えません。仲井真沖縄県知事が埋め立てを容認する姿勢を見せ、移設が動き始めたことを過大評価して、「米国は靖国神社参拝を容認するだろう」と誤算した可能性が考えられます。一方、参拝することを事前に知っていたのがごく一部の人たちに限られていたことを考えると、真情のままに行動したというのが本当のところだったのかもしれない。

一谷内正太郎・国家安全保障局長が訪米してケリー国務長官やチャック・ヘーゲル国防長官、ライス米大統領補佐官と相次いで会談しました。だいぶ密度の濃い会談だったようです。これで日米関係が回復することはありますか。

川上：確かに、主要な閣僚に会えたことは、成功と言えるでしょう。しかし、パッチを当てた程度のこと。関係が即座に改善するとは思えません。しかし別な味方もできます。谷内局長がライス補佐官以外にケリー国務長官とヘーゲル国防長官に会ったということは、政治家ではなく政策担当者とのチャンネルを確保したいという米側のメッセージかもしれません。

一稲嶺市長が今後、普天間飛行場の移設を阻止する行動を起こすことは、日本の安全保障にネガティブな影響を与えるでしょうか。移設が進まず、米海兵隊が今の規模のまま沖縄に留まることは、「日本にとって朗報」と考えることもできます。抑止力を維持できるわけですから。

川上：おっしゃる通りです。西南地域では中国の脅威が高まっています。そこに海兵隊が留まることは決して悪いことではありません。海兵隊にとっては確実にオペレーションができる場所にいることが最重要事項です。

## 公明党の自主投票が推進派の敗因

一選挙そのものについてお伺いします。今回の結果を予想していましたか。自民党は石破茂幹事長や小泉進次郎・内閣府復興政務官などエースを投入して、移設推進派の末松文信候補（前自民党県議）を支援しました。

川上：はい、末松陣営の負けを予想していました。理由は大きく4つあります。最も大きい要因は公明党が自由投票を容認したことです。公明党は名護市で2000票を持っていると言われていました。この票が普天間飛行場の辺野古への移設反対に投じられました。稲嶺市長との差は4000票でしたから、公明とが末松支持に回っていたら、結果は違ったものになっていたかもしれません。

第2は、仲井真知事による辺野古埋立の承認が名護市長選の直前——昨年12月27日——になったこと。この承認が、普天間飛行場の移設に対する名護市民の反発を招きました。

仲井真知事の説明の仕方も良くなかったと思います。「苦しい決断だった」と言えばよいところを、たんとした説明に終始しました。

3つめは、普天間飛行場の移設推進派が候補一本化に時間がかかったこと。推進派として、今回敗れた末松候補に加えて、島袋吉和・前名護市長が立候補する意志を表明していました。両候補の一本化になったのも12月25日と市長選の直前でした。

4つめは自民党の選挙戦術。カネで市民の頬をはたくような印象を与えてしまいました。市長選の直前に自民党の石破幹事長が名護市入りし、500億円の名護復興基金を作ると表明したことを稲嶺陣営に逆手にとられました。安倍政権は2014年度の予算編成で、概算要求を上回る3460億円を沖縄復興予算に充当しています。確かに名護市の経済は苦しい状況ですが、こうしたやり方が市民の反発を招いたと言えるでしょう。

—得票は稲嶺氏が約2万票、末松氏が約1万6000票でした。この票差をどのように評価しますか。

川上：これは難しいところです。普天間飛行場の移設を争点とする過去5回の名護市長選で、反対派の得票は今回が最多でした。この意味では票差は大きい。ただし、専門家の間では、稲嶺氏が末松氏の2倍の票を得て当選するという分析がありました。これに比べると末松氏は善戦したと言えます。